多胡　慎平

主題「美術と社会の関わりについて探究し、新たな価値を創造することができる生徒」の育成

1　主題設定の理由

美術科は、表現及び鑑賞の活動を通して造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中にある形や色、材料や表現の意味を捉え、それらを基に新たな意味や価値を創造する資質・能力を育成していく教科と考える。中学校学習指導要領解説美術編に示されている「主体的に表現及び鑑賞の活動に取り組む態度」や「美術文化と豊かに関わること」は、生徒が自らの感じ方や見方・考え方を生かし、学習を自分事として捉えながら価値を創造していく姿だと捉えており、エージェンシーの発揮と深く関わっている。また、現行の学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められており、生徒が学習の見通しをもち、自らの学びを調整しながら課題解決や価値創造に向かうことが重要であると考える。

昨年度の研究では、「アート＆ライフタイム」を経て生徒が美術と「よりよい社会」との関係について考えながら学習に取り組み、美術と社会との関わりを意識して学ぶ姿が見られた点において一定の成果が得られた。また、「探究シート」の活用によって生徒自身が学びを調整し、自らの主題を最後まで捉えながら活動する力を高めることができた。一方で、生徒が美術と社会との関係を踏まえて新たな価値を創造しようとする場面においては、美術と社会の関わりに対する生徒の意識を高めることはできたが、発想や構想、表現の試行錯誤を通して新たな価値を創造することにつなげることはできなかった。

そこで今年度は、「美術と社会の関わりについて探究し、新たな価値を創造することができる生徒」の育成を研究主題に据え、生徒が学習の目標や過程を理解し、自らの判断で学びを調整しながら探究を進めることができる授業づくりを目指す。表現及び鑑賞の活動における振り返りを通して思考や表現を更新していく。これにより、生徒がエージェンシーを発揮し、自己調整学習を通して生活や社会との関わりを踏まえた新たな価値を創造するための資質・能力の育成を図る。

2　生徒がエージェンシーを発揮し、探究的な学びをデザインするための手立て

(1) 身に付いた力を言語化し、自己調整につなげる振り返りの設定

探究的な学びにおいて、生徒がエージェンシーを発揮するためには、活動の結果だけでなく、その過程で自分にどのような力が身に付いたのかを振り返り、自覚することが重要であると考える。美術科では、主題の設定や発想・構想、制作、鑑賞などの多様な学習活動を通して様々な力が育成されるが、生徒自身がそれらを十分に言語化できていない場合、学びが次の活動に生かされにくいという課題がある。そこで、生徒が自分の学びを主体的に捉え、自己調整しながら探究を進めることができるよう、「自分に身に付いた力は何か」を言語化する振り返りを題材の終末に設定する。



＜図１　身に付いた力からエージェンシーへのつながり＞

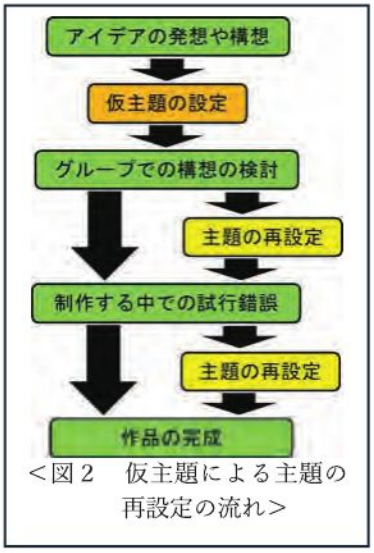
振り返りでは、「自分にどのような力が身に付いたか」「何ができるようになったか」という問いを軸に、美術科の学習で身に付く力の例を提示し、その中から生徒自身が該当すると考えられるものを選び、具体的な場面と結び付けて記述できるようにする。

このような振り返りを継続して行うことで、生徒は自らの学びを客観的に捉え、学習の意味や価値を自覚しながら探究を進めることができるようになると考える。

(2) 主題を更新しながら探究を深めるための「仮主題」の設定

美術科における探究的な学びでは、生徒が自ら主題を設定し、発想や構想を重ねながら表現を深めていくことが重要であると考える。しかし、実際の授業においては生徒は一度設定した主題を変えることはあまりなく、その後の制作や鑑賞の過程で生まれた新たな気付きや疑問、社会との関わりなどに基づいた視点の変化を十分に主題へ反映できないまま活動を進めてしまう姿が見られた。

そこで、題材の導入段階において生徒が設定する主題を「仮主題」として位置付ける。主題をあらかじめ変化するものとして捉えることで、制作の途中で得た発見や、鑑賞活動を通して生じた他者や社会に対する新たな見方や考え方を基に主題を見直したり、問いを付け加えたりすることを意図的に促す。生徒は、主題を更新する過程そのものが探究であることを自覚し、自らの学びを調整しながら表現の意味や価値を再構成していくことができるようになることをねらいとする。



＜図２　仮主題による主題の再設定の流れ＞

このように「仮主題」を軸に学習を進めることで、生徒は、主題を自分自身の思考や経験の変化に応じて主体的に捉え直すようになる。それによって、生徒はエージェンシーを発揮しながら探究を深め、これまでになかった意味や視点を自らの表現に見いだし、新たな価値を創造する力を高めていくことが期待される。

なお、本研究では「仮主題」や「本主題」と表現しているが、実際の授業内で扱う言葉はあくまで「主題」であり、「仮主題」や「本主題」という表現は使用しないことに留意されたい。

3　授業実践例

(1)題材　　響きあう形と色

(2)実施時期／学年／配当時間　　令和８年５月～７月／第１学年／全８時間

(3)題材の目標

形や色がもつ性質や構成の美しさなどを基に、音楽を聴いて目に見えない感情やイメージを形と色の組み合わせなどによって発想したり構想したりすることができる。また、音楽のイメージから生まれた主題を形や色に置き換え、モダンテクニックなどの表現技法の効果と関連付けながら、自らのイメージが伝わるように工夫して表現することができる。

(4)実践の概要

第１～２時では、音楽を基に表現された抽象画の鑑賞し、形や色彩などから作者が表現しようとした音楽のイメージを考察した。また、実際に音楽を聴いて短時間で表現する活動を通して、形や色などからどのようなイメージが伝わるかを実際に体感し、自分のイメージどのように形や色で表現できるかを考えた。さらに、モダンテクニックなど偶然を生かした技法について学び、音楽の目に見えないイメージを表現するためにはどのようにすればよいかを考えた。そこで、生徒たちは目に見えない音楽のイメージを、形や色によってどのように表現することができるかを考える題材の課題の方向性を共有した。

第３時では、「カルメン」を聴き、その曲から得られる直感的なイメージを言語化した内容を基に「仮主題」を立て、曲から感じられるイメージや感情をもとにどのような描き方をすれば「仮主題」を表現することができるかについて考えた。

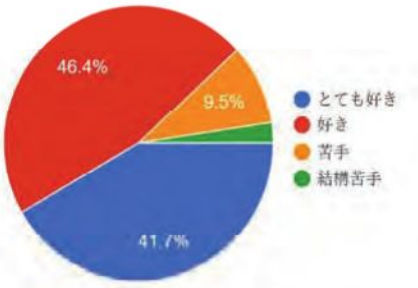
第４～７時では、形や色、線などによるイメージの表現の仕方や、モダンテクニックなど技法を用いた試行錯誤を、設定した「仮主題」と照らし合わせながら探究した。生徒は、ドリッピングやスパッタリングなどの技法によって生まれた偶然の形や色の重なりを、自身のイメージと結び付けて解釈し、「主題」を修正する活動を行った。その際、「当初の仮主題では、この青い音のイメージから来る静けさを説明できない」などといった違和感を大切にしたり、構想について互いに検討し合う機会を設けたりすることで、表現の変化に合わせて主題を書き換えていく過程を繰り返した。この「仮主題」から「本主題」

へと移行させる過程そのものを探究の中心に据えることで、生徒は自分の表現のイメージがもつ新たな可能性に気付き、主体的によりよいと考える主題を再構成する力を働かせることができた。

第８時には、完成した作品を相互に鑑賞し、他者の視点から自分の表現の価値を再発見し合った。「形と色の表現だけで、自分が意図した以上の感情が伝わっている」などの気付きから、生徒は最終的に確定させた「本主題」を達成できたか改めて振り返った。振り返りからは「最初は単純な感情だったが、制作を通じた発見を重ねることで、自分でも気付かなかった深い内面を表す主題に到達できた」という視点だけでなく、「抽象的な表現構成は、ポスターや街の景観など、社会の視覚情報にも通じている」という多面的な視点をもつことができた。このように、題材を通して主題を更新し続け、身に付いた力を自覚的に発揮する機会を取り入れることで、生徒は美術と自己の生き方や社会を結び付けて探究し続けることができた。

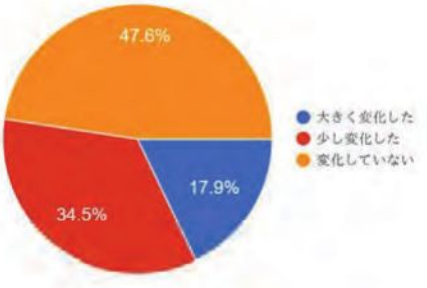
4　研究の成果と課題

一つ目の成果は、「身に付いた力を言語化する振り返り」を設定したことにより、生徒が自らの学習過程を客観的に見つめ、学習の意味や価値の自覚につなげることができたことである。アンケート結果の分析から、生徒の美術に対する苦手意識や主題の変化の違いに関わらず、生徒の言葉から前向きな自身の成長が語られていた。美術での表現活動を苦手だと考える生徒は 11.9%（図３）いるが、モダンテクニックなどの新しい技法を学習することで、偶然生まれた形や色を活用し、状況に合わせて柔軟に自分の主題を更新させていった。過去に経験してきた「写実的に表現すること」に囚われなくてよい、新たな表現の価値に気付き、最後まで完成できたことの達成感から自分で表現する力が身に付いたと考える生徒や、逆に使いたい表現方法が使えないときにどう対処するかという力が身に付いたとする生徒もいた。また、88.1%（図３）の美術への意欲が高い生徒は、楽曲を聴いたり実際に制作したりする中で生まれた主題に対するイメージの変化を前向きに捉えて新たな主題へ更新し、自分の作品をよりよくするために的確な判断をする力などの主題の変化に合わせて表現を自己調整する力を自覚していた。さらに、最初から主題を変更することがなかった生徒にとっては、自分の意図を最後まで形にする初志貫徹してやり切る力として受け止めることができ、生徒が多様な学習過程においてそれぞれ身に付いた力を自覚し、全体的にエージェンシーを高める結果となった。



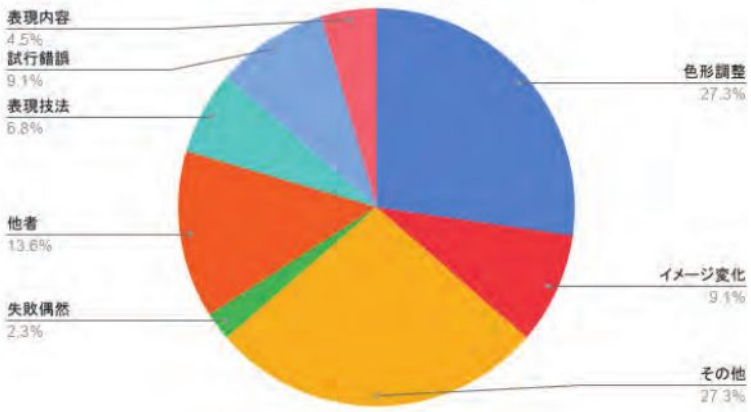
＜図３　美術で何かをつくったりすることは好きかに関するアンケート結果＞

二つ目は、「仮主題」の考えを生徒に設定したことで、初めに決めたことを必ず続けなくてはいけないなどの生徒がもつ考えを揺さぶり、自己調整しながら最後まで探究を行っていく上で有効に機能したことである。主題の変化があった生徒たちは全体の 52.4%（図４）であり、アイデアスケッチや制作の試行錯誤の過程で生じた自分のイメージに対する違和感や偶然生まれた新たな考えをきっかけに、主題を更新しながら活動に取り組んだ。それによって自らの表現に新たな意味や視点という価値を見出し、新たな価値を創造しようとするエージェンシーの発揮へとつなげることができたと考える。生徒が主題が変化した理由として挙げたもので最も多いのが、色や形の調整に関する内容が 27.3%（図５）で最も多く、「もっと感情差が激しいから大胆に書こうかなと思い、優しく



＜図４　表現しようとした主題が途中で変化したかに関するアンケート結果＞

上品なところは色の混ざりがこっちの方がいいのではなどを考えられた。」「もっと明るく聞こえたし、色んな音が聞こえてきて暖色を足した。」など音楽を繰り返し聞いたことで生徒の受け止め方が変わり、色や形を調整していた。次に多かったのが他者の表現に関する内容（他者 13.6%）で、「他の吹き流しをたくさん入れている人を見た時に綺麗だなと思って、参考にできた。」「色や描く技法が同じだとつまらないから、変えたいと思い変化した。曲や友達の作品を見ているとこういうのもいいかもとアイデアが浮かび、変化した。」など、自分以外の表現を参考に主題の変化を起こし、新たな価値を創造することができた生徒も見られた。



＜図５　主題が変化した理由に関するアンケート結果を分類＞

課題としては、「仮主題」から主題を更新していく過程において、試行錯誤する過程で偶然生まれた形や色に振り回されて方向性を見失ってしまう生徒や、逆に当初のイメージに固執して仮主題の更新が形式的なものにとどまってしまう生徒がいた点である。自らの主題を客観的に見つめ直し、生徒が主体的に主題を再構成できるよう促す教師の適切な問いかけや見取りの工夫が必要であると考えた。

5　今後の展望

今後は、仮主題の設定による主題の更新と、身に付いた力を言語化する振り返りを継続していくことで、生徒が主題を更新しつつ、その探究や他の生徒との交流などによって新たな価値を創造していくことができるよう支援していきたい。また、身に付いた力を生徒が次の授業でどのように生かしていくか探究していきたい。

＜参考文献＞

群馬県教育委員会（2019）『はばたく群馬の指導プランⅡ』.
三澤　一実・田中 真二朗他（2021）『美術の授業のつくりかた』,武蔵野美術大学出版局.
文部科学省（2018）『中学校学習指導要領解説　美術編』,学校図書.